

## 住吉市民病院からの「遺産」

写真上は3月21日開催の「大阪を知り・考えるシンポジウム」のチラシ。会場の西成区民センターは地下鉄四つ橋線「岸里駅」のすぐ近くにあった。シンポジウムのタイトルは「住吉市民病院からの『遺産』と『これから』」。

大阪市南部の地域医療で大きな役割を果たしてきた大阪市立住吉市民病院は3月末で廃止される。なぜ市立病院を廃止するのか、疑問に感じていた。前日20日、朝日新聞朝刊に同病院の医療ソーシャルワーカー中辻潔さんの発言が大きく掲載されていた。住吉市民病院は「とくに未成年の妊産婦にとっては学校であり居場所でした」と。この記事にも注目して、シンポジウムに参加した。

シンポジウムでは、最初に「大阪を知り・考える市民の会」世話人の中野雅司さんが主催者挨拶。

NPO法人「み・らいず」の山中文さんと榎谷礼路さんが「大阪市南部地域の状況—子どもたちが置かれている現状について」語った。2001年の設立時から、「地域でくらす」

とはどういうことか考えながら、何が必要か気づいたことをやってきたと。若い人たちの地道な地域での活動を聴いて、なんだか元気をもらうことができた。

次に、住吉市民病院院長の舟本仁一さんが「住吉市民病院の『遺産』とは」と題して話した。閉院を目前にして、病院長のあつい思いが伝わる講演だった。住吉市民病院を利用される全ての人に対し、医療を中心としつつも、その経済的・社会的背景にも視野を広げ、行政・地域と連携し柔軟に対応してきた。この時間的・空間的範囲の広さと柔軟性、さらにそれらを支える職員全体の心が、「遺産」です。承継されずに忘れ去られてしまうことがないように願います、と。胸に迫るメッセージであった。

休憩をはさんで、「クロストーク&質疑応答」に。舟木さんと山中さん、榎谷さん、そして中辻さんが登壇し、司会を共催の「公共政策ラボ」代表の平松邦夫さんが努めた。平松さんは元大阪市長であり、じつに巧みな司会であった。会場からは病院廃止の不安、地域医療への要望などが次々に出された。維新政治による公立病院廃止と住吉市民病院からの「遺産」継承について発言しようと思ったが、残念ながら時間切れとなった。

(2018年3月22日)

